

出発点は神

(ヨブ 38・1〜7)

一、ヨブ記について

ヨブ記1章1節に「ウツの地にヨブという名の人がいた。この人は潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっていた。」と書かれています。「ウツの地」はどこにあったのでしょうか。はつきり「ここだ」と特定することはむずかしいようですが、イスラエルから見て東側の地域であったようです。1章3節に「それでこの人（ヨブ）は東の人々の中で一番の富豪であった。」と書かれているからです。イスラエルから見て東に住む人で、主なる神を信じ、何の落ち度もない信仰者だったという設定です。

では、ヨブが生きた時代はいつ頃だったのでしょうか。家畜と男女のしもべがいます。また、宗教生活が、祭司や特別な聖所と無関係に営まれています。あるいは、カルデヤ人という、後のバビロニア帝国の人々が遊牧の民として描かれています。さらに、「ケシタ」という貨幣の単位が現れます。とすることから、アブラハムと同時代であったと推測できます。

そのヨブについて、ヨブ記は語っています。今一度1章1節をご覧ください。この人は潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっていた。」と。なのに、たった一日の内に財産を、すなわち家

畜としもべを失い、七人の息子と三人の娘を失いました。その後、ヨブ自身は皮膚病になりました。

善人、すなわち神のご意志を尊重して生きている信仰篤き人に、災いが降りかかるのはなぜか。これは、今日においても信仰者が直面する課題です。そういう場合、信仰を持たない方のほうが、有利かも知れません。「人生はそんなものだ」と、割り切ることができずからです。ですが、聖書が指し示す神は、ただおひとりにして、善なる神です。ましてや、イエス・キリストを救い主、子なる神と信じることにより、父・子・聖霊なる神への信仰に導かれている私たちは、ヨブを自分、ないしは自分の周囲にいる人に重ね合わせて、苦しむわけです。

その際、全能なる神がそのようなことを許されるのはなぜなのでしょうかと問うてみても、答えはありません。人は、その人がどんなに知恵者であっても、信心深い人であっても、答えを出すことはできません。むしろ、人の知恵によって答えを出そうとするなら、かえって神の御意思から逸れてしまう結果になる、あるいは信仰者が一所懸命に答えを出そうとすると、かえって神の御意思から逸れてしまう結果になる。が、きょう開いたヨブ記38章の直前まで語られている内容の、私なりの要約です。

二、語られるのは【主】

私たちが抱いている、様々な解決していない思いに対して、語ることできるお方は神だけです。38章1節をご覧ください。「【主】はあらしの中からヨブに答えて仰せられた。」とあります。

【主】とはイスラエルにご自身をあらわされた神の名です。2節をご覧ください。「知識もなく言い分を述べて、摂理を暗くするこの者はだれか。」と【主】は語っておられます。「摂理を暗くする」とはどういう意味でしょうか。新共同訳は「神の経綸を暗くする」、口語訳は「神の計りごとを暗くする」です。「摂理」は「経綸」「計りごと」と訳された元の言葉は「エイツァー」で、「デザイン」「計画」「構想」「目的」を意味します。自分の考えに固執し、神に食い下がるのは「摂理を暗くする」者なのです。私たちが生きている世界は「創世記1・31神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった。」と神がおっしゃった世界です。ヨブ記38章7節には「そのとき（天地を創られた時、明けの星々が共に喜び歌い、神の子たちはみな喜び叫んだ。」とあり、創造の業を見ていた星々が、すなわち天使たちが喜び叫んだと、詩的な表現で書かれている世界なのです。

三、「知らない」を知る

神はおられるのでしょうか、おられ

ないのでしょうか。生まれながらの私たちには分かりません。これが、神の前に最も自然な姿であると信じます。教会に連なっている人たちは、おひとりなる神が世界を始められたと「信じて」います。「知っている」のではなく、「信じて」います。信じるとは、自分が頭の中で思い浮かべたことを信じているのではありません。その順番では、人の思索によって神が生まれたことになりません。ですが、聖書は証言しています。創世記1章1節です。「初めに、神が天と地を創造した。」と。この文言を、創世記1章の要約文と受け止めるなら、「天と地を創造した」の中に「人」も含まれます。人間にとつてたいせつなことは、「私は知りません、分かりません」と認めることです。神のことは、生まれたままの人間には何も分からないのです。ですから、神はイエス・キリストによって自身をあらわされた信じ、救われると信じる者です。それだけではありません。その後、「たしかにそうだ」と確信を持つようになります。それは聖霊なる神の働きです。

信仰の出発点は、神がなさった業を信じることです。自分が思い描いた神を信じる時、偶像崇拜の入口に立つこととなります。

「自分は知らない者だ」と知って、聖書に聴き、神を知る者とされようではありませんか。